

# 紀南新聞

令和2年（2020年）  
10月30日  
金曜日  
仏滅

## 保護者の意見集約へ

### 高校再編で新宮市PTA

新宮高校と新翔高校の統合も視野に入れた和歌山県立高校の再編問題に関し、高校進学を控えた子を持つ保護者らの意見を集約して県教育委員会に伝えようと、新宮市立小中学校の育友会でつくる「新宮市PTA」の育友会で行った。

## 11月下旬に県教委と懇談

今年8月、有識者による教育審議会から「県立高等学校の今後のあり方」が示された。再編案では、令和5年度以降に現在の県立高校29校を20校程度にするイメージで、新宮市とその周辺地域について、適正規模（1学年6学級）程度の高校1校に再編整備する必要性を指摘。普通科と総合学科教育システムを併設し、それぞれを分校舎とすることで、学校施設の有効活用を可能にするとし、新宮高校と新翔高校の統合を示唆している。

県教委は、9月から10月にかけて県内5か所で地方別懇談会を開催。新宮市では9月27日に新宮高校であり、約150人が参加した。当初は5か所のみの予定だったが、より多くの県民から意見を聞くため、団体単位の懇談会開催を11月末まで延長している（受付は11月6日まで）。

懇談会での説明資料と概要を配布。市PTA連がまずは学校単位で保護者の意見を集めている。11月中旬に市PTA連で会議を開き、各校から寄せられた意見を集約したあと、同月下旬に県教委と懇談の場を持ち、保護者の思いを伝えることにしている。



意見交換する城南中の保護者ら

城南中での懇談会で、育友会の板谷貴史副会長が今回の趣旨を説明。県全体と東牟婁地域の中学校卒業生徒数の推移グラフを示し、「人口減の中でこの地域にどの

ような高校を作るのがいいのか。保護者もいろいろな意見を出して県教委に伝えていくことが大切」と呼び掛けた。

続いて、参加者が4人ずつの3つのグループに分かれて意見交換。「田辺地域にある工業や農業の学科を串本に作れば、田辺と新宮のちょうど中間で通学も可能。串本の活性化にもつながる」。

「遠方の高校に入学する場合、県独自の奨学金制度を設け、将来県内で就職すれば返還免除という仕組みにすれば若者も地元に残るのでは」。「学力の差の問題に対して、選択肢は作ってあげてほしい。新翔高校を看護や情報技術、スポーツに特化した高校にし、新宮高校は学力向上のための進学校にしては」。「広域への通学を考えると交通インフラの整備も必要」など、さまざまな意見が出た。

また、再編に直接関係するのは現在の小学校世代になることから、小学校の保護者の意見を優先的に配慮するよう求める声もあったが、高校進学を見据えて議論する中学校の保護者の意見も現実的で重要のため、その部分は無理にまとめることなくそれぞれの思いを伝えたい」と述べた。

（深瀬浩司）

